

カンファレンスを活用した看護師教育 —看護学生との共同カンファレンスを導入して—

○桑原 淑子（福岡赤十字病院）
田嶋 紀美子（元 福岡赤十字病院）
江藤 節代（日本赤十字九州国際看護大学）

I. はじめに

カンファレンスの教育的意義は、他者と討議することにより自己の考えを再構築し自己啓発できる点にある¹⁾。現在、筆者が受け入れている臨地実習における学生カンファレンスは、学生と教員、そして実習指導者によって構成され実施されている。学生の問題意識を中心に据えたテーマが選ばれ、理論的な知識を活用し、新しい看護の動向を踏まえつつ活発に行われている。そのカンファレンスに参加する実習指導者にとって看護を探究する貴重な場となっている。

そこで、筆者は実習指導者以外の看護師にもこのような機会を与えることで、看護師教育の効果を高めることが出来るのではないかと考えた。大学教員に、看護師教育を目的とした学生と教員、看護師による共同のカンファレンス（以下共同カンファレンス）を開催することを提案し、年間を通して実施する合意を得た。

今回、共同カンファレンスが看護師に与えた影響を、看護師教育の視点から評価することを目的に研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 研究対象；A総合病院（400床規模）の小児病棟の看護師
2. 研究期間；H 18. 5月～H 19. 2月
3. 研究方法

1) 共同カンファレンスの運営

2週間の実習期間中に平均3回の共同カンファレンスを実施する。学生の問題意識からテーマを設定し、資料は学生が準備する。時間は、原則30分間。参加者は、看護師（4～6名）、師長、学生6名、教員1名

2) 研究方法；年間を通して共同カンファレンスを実施した後に、共同カンファレンスに対する認識を、自記式質問紙法を用い調査する。参加してどのように感じたかを3段階評価と自由記載してもらう。無記名とし、年度末に看護師に質問紙を配布し、病棟に設置したポストに投函し回収する。

3) 分析方法；3段階評価は単純集計する。自由記載については、KJ法を用いて分析する。信頼性、妥当性を確保するために、3名の研究者が各々分析した結果を持ちより、合同で再分析した。

4) 倫理的配慮；研究の目的、参加は自由であり、研究の不参加により不利益が生じないこと、無記名で個人が特定できないことを文書で説明し、同意を得た。

III. 結果

1. 研究参加者；A総合病院の小児病棟に勤務した看護師17名に配布した。回収率100%。その内、カンファレンスに参加していない5名を除く12名（80%）を分析対象とした。研究参加者の背景は、看護師経験年数1～3年は9名、5～8年は5名、10年以上は3名であった。

2. 共同カンファレンスの実際

研究期間に計 20 回の共同カンファレンスを行った。表 1 に、共同カンファレンスのテーマの代表例とその検討内容を示す。

表 1 共同カンファレンスのテーマと検討内容

テーマ (例)	検討内容
未熟児室における安全管理と母子相互作用促進の矛盾	<ul style="list-style-type: none"> ・安全管理の視点からみた面会制限のエビデンス ・母子相互作用の重要性 ・看護者のジレンマと今後の看護管理の方向性
偏食がある患児に対する「食育」	<ul style="list-style-type: none"> ・食事療法が必要な子どもや家族には指導するが、偏食等については意識的介入が出来ていない ・看護師が「食育」の視点を持ち看護を展開する必要がある。
「病みの軌跡」を活用した先天奇形児の術前・術後の看護	<ul style="list-style-type: none"> ・疾患中心の術前後の看護に終始しがちな現状。 ・「病みの軌跡」の理論的知識を用いることにより対象理解ができ、看護の質が深まる。
入院が長期化する家族が何故安定しているのか分析する	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した現状に満足するのではなく、家族機能が安定している要因を分析し看護に活かすことが必要。 ・家族をエンパワーメントする看護を意識する。

3. 質問紙による調査結果

1) 共同カンファレンスに対する認識 (3 段階評価)

「参加してどのように感じたか」の質問に対して、「良かった」は 11 名、「どちらでもない」は 1 名、「悪かった」は 0 名であった。全員が、共同カンファレンスに好意的な反応を示している。

2) 共同カンファレンスに対する認識 (自由記載) 「参加してどのように感じたか」の自由記載内容を KJ 法により分類した結果、表 2 に示すように、5 つにカテゴリー化できた。

表 2 共同カンファレンスに参加して感じたこと

看護の視点が拡大する	<ul style="list-style-type: none"> ・見落とししたり、気づかなかった視点に気付く ・学生ならではの新たな発想、違う立場からの意見が聞ける。 ・自己の考えを伝えたり、他人の考えを聴く機会となる。
日常の「当たり前」を見直すきっかけとなる	<ul style="list-style-type: none"> ・「当たり前」と思っている管理システム・業務を客観的に考え直すきっかけとなる。 ・気になりながらもそのままにしていた看護を振り返る機会となる。 ・学生が疑問に思うことを表出することで、違った視点から日常の看護を見直す機会となる。
対象の看護を深く探究できる	<ul style="list-style-type: none"> ・対象を理解する上で必要な情報把握ができ、参考になった。 ・理論的知識を用いて検討したことで、看護を客観的に振り返る事が出来た。 ・看護師自身の振り返りの機会となる。
看護の取り組みへの気持ちが変化する	<ul style="list-style-type: none"> ・視野を広くして、看護を行っていく大

切さを感じた。

- ・初心に戻れる。
- ・もっと学ぶ必要があると感じた。
- ・刺激となり、やる気が出た。

看護観が明確になっていく

- ・カンファレンスで自分の看護について言語化したり、思考ができ、自己の看護観を再認識する機会になった。

III. 考察

共同カンファレンスの意義を認める意見が大半であった。また、自由記載を分析した結果、看護師は『看護の視点が拡大する』、『日常の「当たり前」を見直すきっかけとなる』、『対象の看護を深く探求できる』、『看護の取り組みへの気持ちに変化する』、『看護観が明確になっていく』などの教育的効果が得られていることが明らかとなった。

カンファレンスの教育的効果は、固定化している意見が討議の過程を経て修正されていく点にある²⁾が、従来の看護師だけで行ってきたカンファレンスは、同一集団で行うために、画一化された同調行動を生じやすく³⁾業務量や管理、習慣などの現実的制約に捉われる傾向にあり、思考の転換や発展が生じにくい状況にあったと考えられる。

しかし、今回の共同カンファレンスでは、看護師だけでなく、学生と教員を加えた混成メンバーによる討議が可能となった。看護師は経験や知識を兼ね備えた臨床看護の立場から、また、師長は看護の質の向上を志向した管理者の立場からの意見を述べ、学生は看護を学ぶ過程にある者として新鮮でより患者に近い立場から看護を考え発言し、教員は学生の問題意識を尊重しつつ、現象を理解するための理論的知識の

活用、多角的な分析方法の提示、新しい看護の動向を見据えて看護の探究に向かうような刺激を行うなど、それぞれの立場から自由に討議することができた。このような共同カンファレンスを通して看護師は、小児看護の専門性を見つめる機会となり、看護観の明確化につながり、その経験が看護に向かう気持ちの変化も生じさせたものと考えられる。これらは、混成メンバーによる討議ができたことによる教育的成果であると考えられる。

IV. 結論

看護師、学生、教員の混成メンバーによる共同カンファレンスを実施することにより、看護師は『看護の視点が拡大する』、『日常の「当たり前」を見直すきっかけとなる』、『対象の看護を深く探求できる』、『看護の取り組みへの気持ちに変化する』、『看護観が明確になっていく』など、教育的効果が得られていることが明らかになった。

V. 終わりに

本研究は、病棟管理者による研究であること、対象者が少ないことなどによる研究の限界はあるものの、共同カンファレンスが看護師に及ぼす教育的な影響が明らかになったことにおいて意味があると考えられる。管理者として、今後も大学と協力して、お互いが相互研鑽できる場を作り、看護の質を向上させていきたいと考える。

VI. 参考文献

1) カンファレンスはチームで行う看護過程

主任アンド中堅 vol. 6 No.3
P 22 - 32 塚田 ときエ

2) 看護カンファレンス 1994, 5, 1
P 48 川島 みどり・杉野 元子 医学書院

3) サイコ・ナビ心理学案内
2006, 4, 10 P145 山岡 重行編
ブレーン出版